

# がん治療の是非

根深い医療不信の底流にあるものは何か、どうそれを乗り越え、どう病と向き合えばいいのか……。がん治療の常識に正面から疑問を突きつける放射線科医で作家の近藤誠さん(64)と、精神科医の香山リカさん(52)の対談の後編を紹介する。

【構成・藤田祐子、写真・平野幸久】

近藤さんは「がん検診は無駄だ」と主張されています。

近藤 検診で見つかるのは、増大する速度が遅かったり、転移能力がなかったりする、生命を危険にさらす可能性が低いがんです。臓器転移して生命にかかわるがんは検診ではほとんど見つからない。検診と検診の間に体調が悪くなって気付くことが多いというのが私の見方です。ある集団で、一定期間内に死亡する人の割合を「総死亡率」といいます。例えば大腸がんの検診は、米ミネソタ大の1993年の研究で、総死亡率を下げる効果はないことが分かっています。乳がん検診も同様です。

検診には構造的な問題がある。日本の総人口は減り、他方、医師は増えている。このままだと医師1人あたりの収入は減る。それをどうにかするには患者を増やせばいい。いまは健康だと思っている人の中から病気を発掘しようとしているわけです。それで余命が長くなればいいが、そうではない。成人病予防健診なんて、見つかるものはほとんど老化現象なんです。50歳、60歳の人を健康診断すれば、何かは見つかる。それに病名をつけて薬を飲ませているのが今の成人病医療です。

香山 私自身は、検診によ

## 近藤誠さん×香山リカさん 対談② 共存の発想で生きる

### 特集ワイド

る患者の掘り起こしが100%悪いとは思いません。診療室では、若い時から明らかな症状にずっと苦しんでいて、広告や啓発キャンペーンでようやく病院に足を運んで治療を受けて良くなる人に今でも出会いますから。

ただ、新しい抗うつ薬が発売された2001年以降、世界的にうつ病が増えているデータがある。製薬会社が「あなたもうつかも」という広告キャンペーンをして掘り起こした影響だと言われています。掘り起こして救われる患者さんがいる一方、その周囲に膨大な「うつ状態」の人や、

ます。病気が治るものだから、という意識があるのかもしれない。「アンチエイジング」の風潮もありますし、なかなか老いを認めない社会になっていますね。

香山 婦人科でも同じです。更年期を認めず、「病気が、治療してほしい」と頼らない人もいました。若いや自然な気持ちの落ち込みを「あつてはいけない」悪いものとする価値観があるのでは？

近藤 世界のがん研究は変わってきています。昔はがんは段階的に成長すると思われてきました。今は違います。米国のがん生物学の権威、ロバート・ワインバーグ・マサチューセッツ工科大学教授も同意的で、がんの性質は、がんの幹細胞が決まるという考え方が主流になってきました。増殖・転移するがんかそうでないかは幹細胞の段階で既に決まっているという考え方で

内に入った物質で遺伝子が傷つき、設計図が少し書き換えられて性質が変わり、その変異が積み重なってがんになる。それも数種類の遺伝子変異が積み重なってがんになるといわれています。つまりがんの種は誰かが体内に持っている、完全に排除することはできない。日本ではあまり紹介されていませんが、この説に基づくと、がんを根治しようとする治療はすべて無意味になってしまふ。

香山 精神医学でも、治療が必要な病気で、治療する必要がある気分の落ち込みや憂鬱は線引きできないもので

近藤 まさに、がんを告白した女優、樹木希林さんのような、がん共存するという発想ですね。それが一番長生きする秘訣だと思います。

香山 気の持ち方とか、柔軟なものの方が大切だと感

## 常識、検診に疑問／極論を避ける

日常的な気分の落ち込みや悲しみをうつと勘違いしたり、うつに逃避したりする人が出現していると思います。抗うつ薬の処方が増えて適用されなかったパニック障害や極端に内気な性格などにも可能になり、適用範囲がどんどん広がっているんです。製薬会社の市場開拓が背景にあるのではと指摘されています。

香山 がん研究は変わってきています。昔はがんは段階的に成長すると思われてきました。今は違います。米国のがん生物学の権威、ロバート・ワインバーグ・マサチューセッツ工科大学教授も同意的で、がんの性質は、がんの幹細胞が決まるという考え方が主流になってきました。増殖・転移するがんかそうでないかは幹細胞の段階で既に決まっているという考え方で

近藤 世界のがん研究は変わってきています。昔はがんは段階的に成長すると思われてきました。今は違います。米国のがん生物学の権威、ロバート・ワインバーグ・マサチューセッツ工科大学教授も同意的で、がんの性質は、がんの幹細胞が決まるという考え方が主流になってきました。増殖・転移するがんかそうでないかは幹細胞の段階で既に決まっているという考え方で

香山 精神医学でも、治療が必要な病気で、治療する必要がある気分の落ち込みや憂鬱は線引きできないもので

近藤 まさに、がんを告白した女優、樹木希林さんのような、がん共存するという発想ですね。それが一番長生きする秘訣だと思います。

香山 気の持ち方とか、柔軟なものの方が大切だと感

香山 成人病の世界では、高齢者は具合が悪いときに「病気が」と言われると安心する。「これは老化ですね」というと怒り出す傾向があり

香山 がん研究は変わってきています。昔はがんは段階的に成長すると思われてきました。今は違います。米国のがん生物学の権威、ロバート・ワインバーグ・マサチューセッツ工科大学教授も同意的で、がんの性質は、がんの幹細胞が決まるという考え方が主流になってきました。増殖・転移するがんかそうでないかは幹細胞の段階で既に決まっているという考え方で

近藤 世界のがん研究は変わってきています。昔はがんは段階的に成長すると思われてきました。今は違います。米国のがん生物学の権威、ロバート・ワインバーグ・マサチューセッツ工科大学教授も同意的で、がんの性質は、がんの幹細胞が決まるという考え方が主流になってきました。増殖・転移するがんかそうでないかは幹細胞の段階で既に決まっているという考え方で

香山 精神医学でも、治療が必要な病気で、治療する必要がある気分の落ち込みや憂鬱は線引きできないもので

近藤 まさに、がんを告白した女優、樹木希林さんのような、がん共存するという発想ですね。それが一番長生きする秘訣だと思います。

香山 気の持ち方とか、柔軟なものの方が大切だと感

